

聴覚特別支援学校高等部専攻科における敬意表現運用指導の実践報告

著者	田中 優子
著者別名	Tanaka Yuko
雑誌名	筑波大学特別支援教育研究
巻	9
ページ	40-44
発行年	2015-03
その他のタイトル	A Report on the Guidance of the Practical Usage of Japanese Polite Expressions at the Advanced Vocational Course of Senior High School Department of the Deaf
URL	http://hdl.handle.net/2241/00144224

聴覚特別支援学校高等部専攻科における 敬意表現運用指導の実践報告

田中 優子*

本報告は、2013年度～2014年度に行った高等部専攻科の国語の授業における取組みを報告するものである。専攻科における授業では2年後の就職を見据え、聾学校では少なくなりがちな「声に出して話す」練習を取り入れ、実践的なコミュニケーション力の向上を目指す指導を心がけている。具体的には、毎回の授業で場面設定を示したロールプレイカードを配布し、生徒全員がロールプレイを行い、その結果をフィードバックしていくという取組みを行った。その際に次の2点に重点を置いた。

- ①ある程度決まった表現のパターンを覚えさせる。
- ②相手への配慮をどのように表現していったらいいかを常に考えさせる。

半年間の取組みの結果、生徒達は相手への配慮を考えたコミュニケーションを考えられるようになり、成果が見られた。

キー・ワード：敬意表現、ロールプレイ、聴覚障害

I. はじめに

高校の学習指導要領では、国語においては「伝え合う力を高めること」が目標の1つに掲げられている。伝え合う力、すなわちコミュニケーション能力において、敬意表現を正しく運用する力は、不可欠な能力の1つである。

かつての日本の敬語研究は、言語形式の正しさに重点が置かれていたが、2000年12月に国語審議会が「現代社会における敬意表現」を答申して以降、相手と場面に配慮した言葉遣いであるかどうかにかぎりが置かれるようになった。これはBrown & Levinson (1987)の理論におけるポライトネスの定義、すなわち「円滑な人間関係を確立・維持するための言語的ストラテジー (= 戦略)」につながるものである。

このような、相手と場面に配慮した敬意表現を適切に使う能力は、社会生活を送る上で不可欠なものであるが、聴覚に障害がある生徒に限らず、現代の若者たちが敬意表現使用に未習熟であり、自発的な発話で敬意表現を使用する訓練の機会に恵まれていないことは吉岡 (1999)でも指摘されている。聴覚特別支援学校である本校専攻科の生徒は、課程を終えた後、企業への就職を希望する者が多いため、課程修了後の就職を見据えて指導する必要がある。良好な人間関係を築くために必要な言語運用ストラテジーを身に付けることは、生徒達の自

立への支援にもつながると考えられる。また、聾教育の研究では、言語能力の4技能（話すこと・聞くこと・書くこと・読むこと）のうち、「話すこと」「聞くこと」についての試みが少ないように思われるが、ロールプレイを通じて相手とのやり取りの練習を積極的に行うことで、総合的なコミュニケーション能力の向上につながれると考えた。拙稿 (2014)では、上記のような事情を踏まえ、2013年度2学期に専攻科の生徒の国語の授業で行った指導の内容と結果について報告した。本稿は、その後も同じクラスで継続して実施した指導の内容を中心に報告するものである。なお、今回の研究に関しては、生徒達から協力の同意を得ている。

II. 指導の目的と指導方法

対象の授業は、本校専攻科の国語の授業 (2013、2014年度)で、受講者は4名である。

指導対象の生徒達は全員が100dB以上の最重度聴覚障害者であり、普段のコミュニケーション手段として主に手話と口話を用いている。4人とも、表現が直接的になる傾向が見られ、書き言葉では助詞の間違いなども見られる。聴覚に障害がある児童・生徒には助詞の間違いが多く見られる傾向があることは、先行研究でも多く指摘されている (澤2000、澤・勝俣2001、金・伊藤2010、大割・松崎2011)。さらに、Ⅲの1で提示する、

*筑波大学附属聴覚特別支援学校

生徒の1学期の手紙に見られるように、尊敬語と謙譲語の間違いも多い。敬意表現は常に相手を想定して使われる表現であるため、聴覚に障害がある生徒達の不得意とするところだと推測される。

このような、生徒達が苦手とする部分を補うためには、声に出して、表現を意識させ、実際に使う練習をさせることが有効と考えた。そこで、依頼・感謝・謝罪・勧誘・断りの表現を使う場面を設定し、2013年度の2学期より、毎回の授業（週2回）の最初の15分程度でロールプレイによる練習を行うことにした。

聴覚に障害がある生徒は、国語の授業において、通常このような形での練習を行うことはあまりないと思われる。現に、対象の4人もこういった練習は初めてだということだった。「話すこと」「聞くこと」「書くこと」「読むこと」の4技能をバランスよく使うことは言語指導において必要なことであり、その練習を通じてコミュニケーションの自然な流れや間合いも意識することができ、強くインプットできるのではないかと考えた。

毎回、ロールプレイカードを配布し、その設定で1人ずつ担当教員を相手にロールプレイを行った。その後、教員がその場面における留意事項などを説明し、生徒の間違いなども必要に応じて指摘した。また、毎回のロールプレイはすべて生徒の同意を得てICレコーダーで記録し、文字化したものは生徒にフィードバックした。それによって、生徒は自分の間違いの傾向を認識し、改善する手助けになると考えた。2学期は学校での生徒と教員の会話という設定で練習を行い、3学期以降は会社に

おける社員と上司あるいは先輩との会話という設定で練習を行った。3学期以降は生徒達の習熟度が上がったため、回数を減らし、週1回のペースで実施した。

聴覚に障害がある生徒の指導では、耳から入る情報の少なさを補うためのパターン練習は必要と考えるが、坂本(2001)でも指摘されているように、コミュニケーションにおいては、敬意表現が正しく使えていても、一連のやり取りの流れの中で正しい配慮がなされていなければ、それは適切な言語運用とは言えない。そこで、いくつかのやり取りのパターンを繰り返し練習させることで、必要な表現の定着を図ると同時に、相手に対してどのような配慮が必要なのか、コミュニケーション上のストラテジーを考えながら話すことに注意を向けさせ、言語運用能力を伸ばしていけるような指導を試みた。

Ⅲ. 指導内容

1. 生徒の言語運用能力の把握

ロールプレイによる練習に先立ち、2013年7月（1学期末）時点で、生徒の言語運用能力を把握する目的で、生徒に下記のような作文課題を出した。

課題：あなたは就職活動のための自己PR文を書きました。それを学校の国語の先生に見てもらいに職員室に行きました。でも、先生が席にいなかったので、先生の机の上に、あなたが書いた自己PR文を置いて、先生にお願いの簡単な手紙を書いておくことにしました。その手紙を書いてください。

誤用が見られた部分には下線を引いた。この時点で

Table1 生徒の作文

S1	A先生、私は就職活動のための自己PRの作文を書きました。もし、よければ、A先生、私が書いた就職活動のための自己PRの作文を拝見していただくと嬉しいです。宜しくお願いいたします。
S2	申し訳ありませんが、私の自己PRの作文をご確認してもよろしいでしょうか。どうぞよろしくお願ひします。
S3	A先生、私の自己PRの作文を間違いないように確認してお願いします。
S4	A先生、就職活動のために自己PRの作文を書いたのを見ていただけますか？

は、全員が前置きもなく、いきなり本題に入っている。また、依頼の仕方も直接的な表現が多く、相手への配慮の表現はあまり見られない。敬意表現の間違いも見られる。特に尊敬語と謙譲語の混同は、普段の授業でもよく見られた。

2. ロールプレイの内容

Ⅲの1の結果を踏まえ、2013年度の2学期から2014年度の1学期にかけ19種類のロールプレイを繰り返し

行った。本稿では、3学期以降に行ったTable2の⑩以降について報告する。①～⑨の内容については、拙稿(2014)を参照されたい。

3. 指導上のポイント

以下に指導上のポイントをまとめる。

⑩以降では生徒達の来年以降の進路を意識して、職場でのやり取りという場面設定にした。最初は上司とのやり取りの練習をしたが、生徒からの希望があって、⑮～

Table2 ロールプレイの内容

⑩	仕事中の会社の上司に、相談したいことがあるので、時間を作ってもらいたいと頼む。
⑪	仕事中の会社の上司に、自分が書いた書類をチェックしてもらいたいと頼む（この書類は取引先に明後日提出するもの）。
⑫	仕事中の会社の上司に、書類の提出（本当は、今日の昼までに提出するはずだった）が遅れてしまったことを謝る。
⑬	仕事中の会社の上司に、明日休みをもらえないか聞く。
⑭	インフルエンザで1週間、会社を休んだ。久しぶりに出勤して、まず上司にあいさつに行く。
⑮	会社の親しい先輩（工作中）に、書類の作り方を教えてもらいたいと頼む。
⑯	⑮の続きで、先輩に書類の作り方を教えてもらう。
⑰	会社の親しい先輩（工作中）に、スマホの新しいアプリについて教えてもらいたいと頼む。
⑱	会社の親しい先輩（工作中）に、ランチに誘われたが、他に約束があるので、断る。
⑲	会社の上司に残業を頼まれたが、今日はどうしても帰りたい。明日ではダメか聞いてみる。

⑱は先輩とのやり取りを設定した。まず、上司とのやり取りであるが、⑩⑪⑬は依頼の場面である。⑩は個人的な相談なので、相手の時間の都合にも気を遣うべきだが、⑪は逆に仕事に関係することなので、取引先に対して同じ身内同士で仕事を速やかにすべく、必要なことははっきり伝えるように指導した。このように、同じ依頼でも場面や状況によって態度の使い分けが必要である。先行研究における調査でも、状況の緊急性により、使う表現に変化が見られる（梅香・Ota 2010）。ウチとソトの人間関係を意識させるのは指導上の重要なポイントの1つである。⑬はかなり難しい依頼である。本校の生徒達は、思った通りに事実をそのまま言う傾向があるが、「嘘も方便」ということも知っておくべきと考え、項目に加えた。⑫⑭は詫言の場面である。⑫をやってみたところ、4人中3人が、提出時間が過ぎてしまったから詫言に行くという設定でロールプレイを行ったが、それでは遅い。提出時間に間に合わないと思ったところで、それ以前に上司に報告しなければ、仕事に支障をきたすということも指導した。相手の立場に立ち、早めに報告に行くということも言語活動である。⑭は仕事を休んで迷惑をかけたことを詫言つつ、休んだ分も頑張るという積極的な意思表示が必要な場面である。次に先輩とのやり取りであるが、⑮⑰は依頼の場面で、⑯は⑮の続きで感謝の場面となる。同じ依頼でも、⑮は仕事に関係することで、⑰は個人的な内容である。⑰の方が相手の都合などへの配慮がより必要である。⑱⑲は断りの場面で、最も難しい。相手の気持ちを害さずに断る戦略を考えなければならない。⑱は先輩からのランチの誘いという個人的な内容である。本当は行きたいけれど、行けない、という気持ちを伝え、他に行ける日があれば代替日を提案するなど、より具体的に行きたい気持ちを示すことが、相手への配慮につながる。また、⑲のように上司に残業を頼まれたが断る場合は、その日はどうしても無理だということを伝えると同時に、相手の希望に添え

なかったことへの申し訳ない気持ちを示し、翌日でもよいか聞いてみるのが大事だと指導した。なるべく言葉多く事情を説明し、自分の気持ちを伝え、相手に配慮を示すことで誠意が伝わるということも、拙稿（2006,2007）で検証したことである。さらに、フィードバックの際は、間違いが多く見られた敬意表現を繰り返しパターン練習させた。尊敬語や謙譲語の仕組みを考えさせると生徒達が混乱するため、パターン練習で表現を頭に入れるのが有効と考えたためである。

上記のような指導を行い、一巡したところで、繰り返し同じロールプレイをランダムに行い、1回目との比較を行った。

以下にその記録の一部を紹介する。なお、教員（筆者）はTと表わす。注目すべき配慮表現や敬意表現は太字で示した。

IV. 分析と成果

⑩は職場を設定した初めてのロールプレイだったが、配慮の表現も適切に使われており、特に、「お時間があればありがたいのですが」という間接的な表現は、直接的な表現と比べると、より丁寧度が高い。⑰は2回目のロールプレイである。S1は1回目は「今なら大丈夫ですか」と聞き、今はダメと言われると、「明日は大丈夫ですか」と、たたみかけるように聞いていて、相手への配慮が足りなかったが、2回目では「どうでしょうか」と言っているのがよい。「お時間があるときに教えていただけませんか」と聞ければなおよいが、「どうでしょうか」でも、こう言われれば、相手は自分の都合を自然な流れで答えるだろうから、このような形でも構わない。その後も、「昼休みに私が伺いますので」と説明し、「よろしくお願いします」「ありがとうございます」と、必要なことを十分に言っているのが好印象を与える。また、「伺います」という謙譲語も正しく使っているのはS1にとって大きな進歩であった。⑱の1回目

Table3 ⑩の1回目 (S2)

S2: T 課長、仕事に申し訳ありませんが、ちょっとよろしいでしょうか。
T: あ、いいですよ。
S2: お仕事に申し訳ありませんが、相談したいことがありますので、お時間があればありがたいのですが。
T: はい。そうですか。うーん、えーと、急ぎですか。いそぎ？
S2: いえ、自分の悩みがあります。
T: そうですか。えーと、じゃあ、そうですね。来週の、来週の月曜日でもいいですか。
S2: はい。大丈夫です。
T: はい、じゃあ、そういうことで。
S2: お忙しいときに、ありがとうございました。
T: はい。

Table4 ⑰の2回目 (S1)

S1: T 先輩。
T: はい、何？
S1: お仕事に申し訳ありませんが、ちょっとよろしいでしょうか。
T: あ、うん。ちょっとなら。
S1: 先輩の、T 先輩のスマホの新しいアプリを教えていただけたら、うれしいのですが、どうでしょうか。
T: あー、新しいアプリね。いいよ。ただ、仕事はちょっとね、ダメだから、じゃあ、昼休みか、または仕事が終わった後。どっちがいいかな。
S1: 昼休みに、私が伺いますので、その時、スマホの新しいアプリを教えてください。
T: うん、わかった。じゃあ、昼休みね。昼休みに、来てください。
S1: はい。よろしく願います。ありがとうございました。
T: はい。

Table5 ⑱の1回目 (S4)

T: あ、仕事にごめんね。ちょっといい。
S4: はい。
T: あのね、おいしいお店をみつけたんだけど、あの、お昼休みに一緒にランチ、行きませんか。
S4: はい、お誘いは嬉しいんですけど、
T: うん。
S4: 他に約束していることがあるので、今日は行けません。すみません。
T: ああ、そっか。じゃあ、仕方ないね。
S4: でも、またの機会に誘ってくれればうれしいです。
T: ああ、わかった。じゃあ、来週また声かけるね。
S4: はい、ありがとうございます。待ってます。
T: うん、じゃあね。
S4: ありがとうございます。
T: はい。

は、S4は「またの機会に誘ってくれればうれしい」と、気持ちを表明しているため、相手も「じゃあ、来週」というふうに、具体的な話ができるのがよい。「待ってます」と言うことで、積極的に「行きたい」という気持ちを相手に伝えることもできている。⑩⑱のように、1回目から、教員からのフィードバックや説明なしでも完成度の高いロールプレイができるようになってきたことは2学期から積み重ねてきた練習の成果と考えられる。2013年度1学期末に生徒達を書いた手紙文と比較しても、生徒達の進歩は明らかと言える。また、拙稿(2014)で報告したが、2学期末に生徒達を書いた別の課題の手紙では、リーチ(1987、p191)が言うところの「丁寧さの原則」における「共感の原則：自己と他者

との反感を最小限にせよ。」というストラテジーも見られた。相手への配慮という視点を常に持つことを意識しながらロールプレイを繰り返したことが、生徒達の言語運用能力の向上につながったのではないと思われる。

V. まとめと今後の課題

以上のように、2013年度2学期から現在までに行ったロールプレイによるコミュニケーション練習では、生徒達の言語運用力の向上に少なからず効果が認められたと言える。ロールプレイのバリエーションを増やすことで、応用力も身に付いてきたと思われる。ただし、個人レベルで見ると、表現の適切さなど、まだ指導が必要な部分はあるので、今後も引き続き指導を行っていきたい。

参考文献

- 梅香公・Ota J. Hiro(2010) 日本語依頼表現におけるポライトネスについての一考察. コミュニティ振興学部紀要, 10, 181-201.
- Brown,P and Levindon,S(1987) Politeness:Some universals in language usage. Cambridge University Press
- 金銀珠・伊藤智彦(2010) 日本と韓国の聴覚障害児の格助詞「に」に関する統語知識. 東京学芸大学紀要 総合教育科学系 I, 61, 213 - 219.
- 文部科学省(2000) 現代社会における敬意表現.
http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/t20001208001/t20001208001.html
- 文部科学省(2010) 学習指導要領 国語編.
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2010/12/28/1282000_02.pdf
- 大割恵・松崎丈(2011) 聴覚障害のある児童が格助詞の用法に気づき、理解することに視点をあてた教育的支援—各助詞「で」の指導を通して—. ろう教育科, 53(3), 97 - 110.
- リーチ・N・ジェフリー(1987) 語用論. 紀伊国屋書店.
- 坂本恵(2001) 「敬語」と「敬意表現」. 日本語学, 20, 14 - 21.
- 澤隆史(2000) 聴覚障害児の文産出における格助詞誤用と動詞の自他. 東京学芸大学紀要 1 部門, 51, 179 - 184.
- 澤隆史・勝又直(2001) 聴覚障害児の作文における文の統語的・意味的特徴—聾学校児童と生徒の比較から—. 東京学芸大学紀要 1 部門, 52, 177 - 183.
- 田中優子(2006) 日本語学習者の詫びの手紙—母語話者による評価—. 日本語論叢, 7, 12 - 24.
- 田中優子(2007) 日本語学習者の手紙—面白くない本のお礼—. 日本語論叢, 特別号, 329 - 339.
- 田中優子(2014) 高等部専攻科における敬意表現運用指導の実践報告—聴覚障害のある生徒の指導を通して—. 筑波大学附属聴覚特別支援学校紀要, 36(41), 72 - 79.
- 吉岡泰夫(1999) 対話インタラクションとしての敬語行動. 談話のポライトネス, 11 - 122.

A Report on the Guidance of the Practical Usage of Japanese Polite Expressions at the Advanced Vocational Course of Senior High School Department of the Deaf

Yuko Tanaka *

* Special Needs Education School for the Deaf, University of Tsukuba